

講演

行動経済学で考える保険：共同体メカニズムの観点を中心に

慶應義塾大学経済学部教授 大垣昌夫

日本保険年金リスク学会研究発表大会 特別講演
2022年11月26日 慶應義塾大学矢上キャンパス

司会 大垣昌夫さんにご講演を頂きます。演題は、「行動経済学で考える保険：共同体メカニズムの観点を中心に」です。それでは、大垣さんの略歴をご紹介します。

大垣さんは大阪大学をご卒業後、アメリカ・シカゴ大学経済学部で博士課程を修了され、経済学博士の学位を取得されました。その後、同じくアメリカ・ロチェスター大学で助教授、オハイオ州立大学で教授を経て、2009年から慶應義塾大学経済学部で教授として教鞭を振るわれています。この間、2015年から2017年まで行動経済学会会長、2021年から2022年まで日本経済学会会長、そして2020年から日本学術会議会員として、わが国の経済学の発展に務められており、特に行動経済学の分野ではわが国を代表する研究者です。主な著書としては、『行動経済学—伝統的経済学との統合による新しい経済学を目指して』が挙げられます。

われわれJARIP会員の多くは、通常、ふだんから経済学に合理的な判断をするホモ・エコノミカスを前提にリスク評価やプライシング・バリュエーションの分析研究を行っていますが、本日はアニマルスピリッツを持つホモ・サピエンスの行動原理に基づき、保険年金の役割、加入動機について示唆に富んだお話を頂けるものと期待しています。それでは大垣さん、よろしくお願いします。

大垣 どうもありがとうございます。今日は学会の貴重な時間を頂きまして、ありがとうございます。質疑応答も楽しみにしておりますので、よろしくお願いいたします。

今日は、「行動経済学で考える保険：共同体メカニズムの観点を中心に」ということでお話しさせていただきます。

まず、ホモ・エコノミカス、経済人といいますか、感情などを持たない合理的で利己的なホモ・エコノミカスを前提とすることが、私が、伝統的経済学と呼んでいる、主流派経済学と呼んでもいいのですが、そういうものであります。そこで、保険はどのような役目を果たすのかと言いますと、病気、事故、被災などがあつたときに、出費の増加や所得の減少などのリスクがあります。そこで保険購入をする個人の意思決定が多く他の人たちとリスク・シェアリングをします。私は、これを共同体とは呼ばなくて、これを市場メカニズムと呼んでいるのですが、これが社会全体の経済効率性を高めるという、非常に重要な役目を果たします。

まず、生命保険にちょっと注目したいのですが、生命保険はかなり違うんですね。生命保険が他の保険と本質的に違うところは、このリスク・シェアリングによる受益者が意思決定者本人ではないわけです。多くの場合は家族等ですが、他の人たちが受益者であるということが非常に違ってきます。利己的なホモ・エ